

「水辺で乾杯2019」開催報告

まちづくり・防災グループ 研究員 佐治 史

1. はじめに

「水辺で乾杯」と聞けば、既にご存知の方も多いのではないのでしょうか。普段見過ごしていた水辺の魅力に目を向け、粹に楽しもう、そのきっかけとして7月7日午後7時7分に、水辺に集まって乾杯しようというこの試みは、今年度で5年目を迎えました。青い物を身につける、乾杯後は長居をしないとといった「水辺で乾杯アクション5カ条」を守れば、だれもが参加可能です。それに加えて、今年度新たにえられた心得があります。それは、「パーソナル気候変動対応力」。乾杯時期に豪雨被害や悪天候に見舞われた経験を活かし、乾杯1ヵ月前から防災アプリを事前登録し、前日、当日には気象警報・注意報をもとに開催の中止や延期を厭わず判断することが呼びかけられました。

2. 隅田川×リバーフロント研究所×「水辺で乾杯」

リバーフロント研究所が乾杯場所を選んだのは、隅田川の永代橋右岸上流部でした。当研究所が立地する東京都中央区新川1丁目は、隅田川、日本橋川、亀島川に囲まれた地域で、別名霊岸島と呼ばれています。島というだけあって、四方を水辺に囲まれているため乾杯場所には事欠きません。

乾杯当日は、18時50分に現地集合。青色に身を包み、中には浴衣を着たメンバーもちらほら見られるとなると、仕事帰りの道行く人たちのちょっとした注目の的でもあります。隅田川に目をやれば、赤い提灯で川面を照らす屋形船が往来し我々の乾杯に華を添えてくれました。

忘れていけないのは、永代橋。東京都による橋梁の長寿命化の一環として塗装工事が実施されており、乾杯時は完成に向けた最終段階でした。この橋は人々の生活を支える重要なインフラであり、幾度となく自然災害や人災をくぐりぬけてきた、まさに生ける「国の重要文化財」（2007年に指定）です。さかのぼること時は1698年、隅田川の最下流に架けられた木橋の永代橋は、歌川広重の木版画「名所江戸百景 永代橋佃しま」（1857年）、歌川芳虎「東都永代橋風景の図」（1866年）等にも登場します。全国から江戸に物資を運ぶ廻船が集積し、日本橋などが位置する隅田川の西側と東側を往来する旅人や商人の姿が描かれています。安政3（1856）年の安政台風では、大船が橋桁にぶつかって半分崩れかけたとのこと。1923年の関東大震災では焼け落ちてしまったものの、帝都復興事業の象徴としてわずか3年後の1926年には再建されています。この度青色に塗装された新生・永代橋は、2020年の東京オリンピックを目前に控え今日も多

くの人々に利用されています。

写真に見るように、永代橋は長寿命化工事の真っ只中で、その姿は建築現場のシートに隠れています。勇姿を拝めないのは非常に残念ですが、永代橋架橋の長い歴史の中で、工事中の機会はむしろ希少。有り難い出来事といたしましょう。

午後7時7分、総勢20名の参加を得て、隅田川と永代橋を背景に乾杯。川風に吹かれながら仲間と飲む一杯は格別でした。



図 歌川芳虎「東都永代橋風景の図」（国立国会図書館デジタルコレクション）



写真 永代橋を背景に

3. おわりに

ミズベリング事務局の発表によれば、今年度の乾杯場所は全国255ヶ所。水辺の風景をつくる風物詩として、水辺で乾杯が全国各地の水辺ファンの中で根付きつつあることを感じさせます。一方で、今年度はたび重なる台風が全国で甚大な被害をもたらしました。ひとりひとりの「パーソナル気候変動対応力」の鍛錬がますます必要とされていくのではないのでしょうか。

参考文献

・ミズベリングウェブサイト
<https://mizbedekanpai.mizbering.jp/index.html>
 (2020年1月15日最終閲覧)